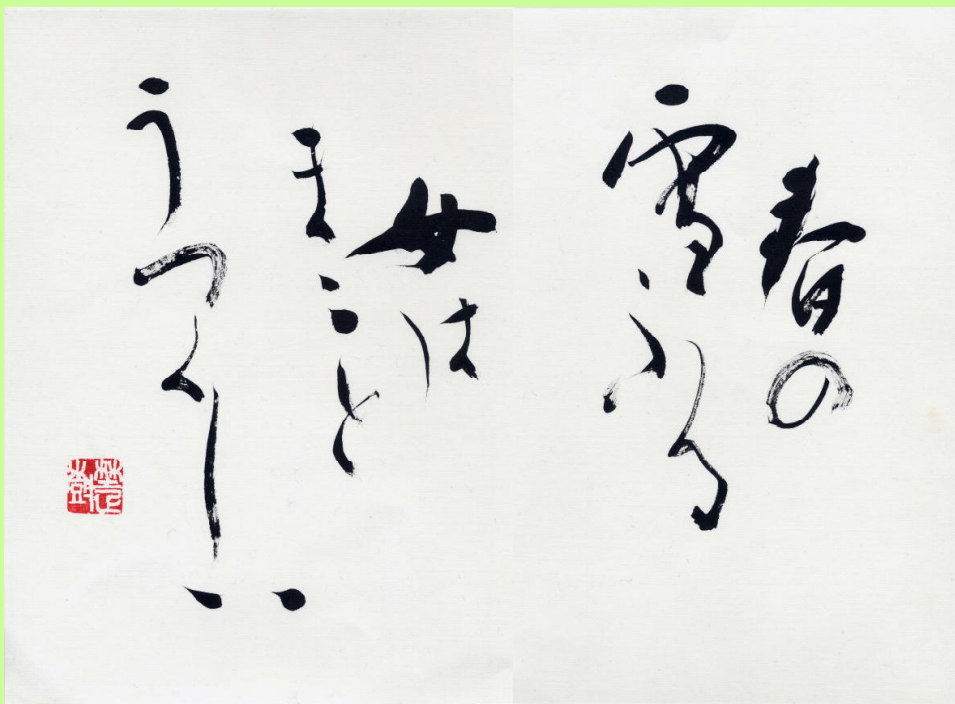


発行所
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)

電話 66-1311
FAX 66-1314

かさおか



春の雪ふる女はまことつくしい

初代の心にかえり信仰の喜びを

深めよう 伝えよう 広げよう

- 一、持ち場立場で日々理作り
- 一、家族揃って教会参拝
- 一、一日一件にをいがけ

立教174年
3月号

夫婦揃って成人の歩みを

教会長夫妻講習会 開催

大教会布教部(中村剛部長)は2月22日、大教会で「立教174年教会長夫妻講習会」を開催、教会長夫妻など210人が参加した。

大教会創立120周年三年千日活動仕上げの年、教会内容充実に向け、まず教会長夫妻の成人と勇みが必要との思いから開かれたもの。今回はおたすけの実例紹介として、初めてパネルディスカッションが取り入れられた。昨年までは教会長を対象に行なわれていた。

開講に先立ち、大教会長様は「記念祭に向け、夫婦揃って成人の歩みを一層進めさせて頂く。ま



初めてのパネルディスカッションに参加者は熱心に聞き入った

た田中勇一先生「教会本部布教部ひのきしん課長」の講話、パネルディスカッションを活用してこれからの布教に力を入れて頂きたい」と挨拶。引き続き、田中先生は「にをいがけは、親神様が心の掃除をして下さるもの。よく断られるが、それは親神様がその人の口を借りて私たちを仕込んで下さっている。これを心にしっかりと治めれば毎日、勇んで通れる」と自身の布教体験を通してにをいがけ、おたすけの大切さ、また記念祭に向かう仕上げの年のつとめ方について話された。

この後、会場を講堂に移し、身近な問題に取り組む部内教会長、同夫人ら5人によるパネルディスカッションが行われた。

司会、パネリスト、内容は次の通り。

- ▽司会、田中隆之福山分教会長
- ▽パネリスト
- 高橋徳行亀田山分教会長
- 「教会おとまり会について」
- 上原順子陶山分教会長夫人
- 「視覚身障者の支援について」
- 森本忠善海松ヶ岡分教会長
- 「少年会員の祭典おつとめ奉仕について」
- 佐藤真孝芳井分教会長

「学童保育について」

○三代信行米美分教会長

「里親について」

参加者の一人は「現在の社会問題にこたえるようにそれぞれの立場を活かして実践されている姿に共感すると共に、教会と地域社会とのつながりの重要を痛感した」と話していた。

最後に、中村布教部長は「この講習会を通して部内教会長が目標に向かい、大教会長様の思いに添わせて頂けるようしかりとつとめさせて頂く」と挨拶し終講した。

大教会本年心定め

- 初席者数 279人(4人)
 - よふぼく数 217人(5人)
 - 修養科修了者数 135人(1人)
 - 教人登録者数 114人(0)
 - 参考) 教人資格講習会 (1人)
 - 教会長資格検定講習会 (1人)
- (括弧内は1月1日~2月28日)

記念祭までに心定めを完遂するよう
つとめさせて頂きましょう

温故知新

本年、笠岡大教会は創立120周年を迎える。大教会の歴史を振り返り、これまで「分教会史」「大教会史」が編纂された。この中で「正史」に載る事の無かった歴代会長様をはじめ、先人達の逸話を上原繁道大教会史料部長に、数回に分けて執筆して頂く。

(編集掛)

いきいきエピソード 1

書き始めるに当たって

「おんこちしん」と読みます。古きを温ねて新しきを知る。そのように物の本に書いてあります。今、大きな節を迎えている、そういう時に、一体先人達はどのように考え行い通ったのだろうか、ひとつ先人達の対処の仕方を学んでみようではないか。それが温故知新という事です。

しかし、温ねようにも何も無い、何も残っていないでは、新しきを知る事はできない。将来を考えれば、残すべきものを残し整理しておかねばならない、百年二百年後を考えるには、やはり私達の足下、つまり今在るその、成ってきた歩みをきっちりとして残しておかねばならないという事ではないかと思えます。

笠岡大教会の歴史を振り返る時、三代会長は川合梅太郎(摩耶分教会初代会長・後に大教会理事)という人を得て昭和初年代、笠岡初代会長存命の時、笠岡分教会史を上梓してくれました。笠岡という名称に寄り集う人々に笠岡の元一日そしてその名称に懸けられた神意を、上原家創設の祖上原佐吉氏(東・笠岡両大教会初代会長の養父)に与えられた三つのおさしづを通して掘り下げ書き残し纏めてくれた事は、分教会から中教会、そして大教会へと続く苦難の連続の歩みの中で実に大変な事だったと思われまます。今思えば、教祖四十年祭をはさんで二十年のあの時代の中に、懸けられた神意の掘り下げの努力がなかったら、現在の笠岡の教勢の進展はなかったと私は考えます。

その時から四十年。時代が全く変わりました。大教会の移転普請が現実のものとなってきた昭和三十年代後半、四代会長は「笠岡大教会史」の編纂を打ち出しました。

「分教会史」作成の昭和初年代からの時代の推移を振り返れば、関東大震災後、日中戦争・太平洋戦争そして終戦、続いて朝鮮戦争・ベトナム戦争に象徴される東西冷戦の中での戦後の社会復興の道と、また天理教団にとっては教祖六十年祭の本教教理並びに組織の復元、教祖七十年祭の陽気ぐらしの門出、おやさとかたの建設、教祖八十年祭の海外布教の再出発等と、

多種多様な歴史の流れがありました。その歴史の流れの中で笠岡は、名称に懸けられた神意の実現を目指して部内先々に至るまで、どんな道歩んできたのか、昭和三十年代後半の笠岡の名称の移転建築という大きな節に向かう歩みのなかで、「分」教会史を「大」教会史として見直す事の大切さを四代会長は私達に望まれた、という気が致します。

その四代会長の思いを、今から思えば全面的に託されたように思われる私が、大教会史第一巻の出版に至るまでに種々の作業の中で見聞きした、また発見した笠岡歴代会長をはじめ先人達の話(大教会史正史に入らない話)を書き残しておこうと思います。思えば私の人生の公的立場での温故知新を目指す時は終わりつつあります。次代の温故知新を目指す人達への参考にもなればと思えます。

大阪の街、そして伊賀上野の町を、かつての上原家の姿を求めて何度も歩き廻り、部内教会史の取材に、現玉島大教会部内を含めて全教会に出向き、取材から帰って来ては忘れないうちにと教会史を綴る。並行して笠岡三代会長をはじめ主だった役員諸氏への聞き書きとその整理、そして最後に大教会史本文、初代会長伝、上原佐吉伝(初代養父)を書き上げた二十年近い歳月を振り返りながら……。

(笠岡史料部長)

信仰の喜びを伝える場への

積極的な参加を

学生層育成者講習会 開催

大教会学生担当委員会(吉岡誠一郎委員長)は2月21日、田中善吉先生(本部学生担当委員長)を講師に迎え、大教会2月月次祭後に「学生層育成者講習会」を開催、約230人が参加した。

学生層をはじめとする道の後継者育成の重要性を理解すると共に、活動を広めていくために毎年開催しているもの。田中先生は「学生層を育成の場・信仰と触れ合う場への積極的な参加を導き出して頂けるよう丹精して頂きたい」と話された。講話要旨は次の通り。

●学生会とは・・・学生担当委員会とは・・・

学生担当委員会の第12期(1期3年・30数年の歴史)が昨年の9月にスタートしました。元々は学生会の活動をサポートするという目的で始まったのですが、百年祭の頃から学生会の活動に参加している学生だけでなく、お道に関わる全ての学生を対象に学生の育成をしっかりと考えていこう

という目的で、現在活動を進めさせていきたいです。

お道には、少年会・青年会・婦人会といった各会の活動があります。中学を卒業しますと男子は青年会、女子は婦人会・女子青年となるわけですが、現実的には本人たちはそのように受け止めにくいものですから、学生会としてその活動の中で後々青年会・婦人会・教会へ繋がってってくれるようにということを中心に心がけて活動を進めさせていきたいです。こどもおぢばがえり・少年ひのきしん隊・春の学生おぢばがえり・学生生徒修養会高校の部・大学の部といわゆる「縦の伝道」の一端を担わせていただくのが少年会の活動であり、学生会・学生担当委員会の活動であります。

●最近の教勢調査では・・・

よふぼくは、だいたい80万人くらいで、そのうち4分の3が60才以上。59才以下は22割、人数で計算すれば約15、6万人くらいになります。その中で学生さん達はというと、非常に少ない。また47教区の中で10代のよふぼく数が2ケタに満たない教区が10数教区あります。こういうことを聞かせていただくと、この先若い人たちの育成・丹精にしっかりと取り組ませていただかねばならないと思います。その一方で年間誕生するよふぼくの割合は、だいたい10代が25割くらい、20代も合わ

せると年間誕生するよふぼくの半分が10代・20代ということになります。如何によふぼくとして自覚をもっていただくか、本当のよふぼくとしてしっかりと丹精させていただくことの大切さを改めて実感させていただきまます。

●今期の学生担当委員会では・・・

「学生に信仰の喜びを伝え、立派なよふぼくに育つよう丹精しよう」、立派なよふぼくに育てていただきたい、という思いで活動方針を掲げさせていただいております。これは真柱様が、若い学生たちに「立派なよふぼく」に育つよう繰り返しお話される上から、真柱様の思いにしっかりと応えさせていただけるよう活動を進めさせていただきます。ということでもあります。学生さんたちは、少年会ときには、それぞれ「ちかい」をしてきています。「立派なよふぼくに育ちます」と神様とちかいをしてきています。そのお手伝いを、学生担当委員会ともしっかりさせていいただきたいと思えます。立派なよふぼくとは、「どんな立場に立っても、教会を抛り所として、教えを抛り所として、おつとめのできる、おたすけのできる、ご恩報じのできるよふぼく」であり、そういうよふぼくへ育てさせていただきたい、ということを申し合わせさせていただいております。その中でも具体的な活動として、毎年の学生生

徒修養会、各地域でのつどいとして高校生を対象とした「まなびば」、大学生を対象とした「ワーク&トーク」への動員、内容の充実を掲げております。「学修」に関して申せば、「にをいがけの心・おたすけの心・布教の心」でつとめさせていたいております。

●学修スタッフに対する真柱様のお話

真柱様はスタッフに対して「スタッフをつとめてくれる者の中には、普段、布教を心がけてくれる者も多いと思う。この学修は、神様のお話を聞いてくれる、そういう人を捜し回らなくても、明日になったらみんなの前にそういう対象となる学生さんたちがやって来るんだ。しかしやって来る学生さんたちは、自分で求めてやって来る者もあれば、そうでない者もと実に色々いる。その学生さんたちが1週間学修を送る中で、楽しかった、友達がたくさん出来た、ということもそれはそれで結構だけれども、それだけにとどまる事なく、1週間で少しでも親神様の御教えが、教祖の御心をわからせていただくことが出来た、という1週間であるように。如何にしてそれをわかってもらえるように伝えさせてもらうか、そういう意味では日々のにをいがけ・布教と同じであるから、にをいがけ・おたすけをするつもりでかかってほしい」と毎年のように仰います。スタッフは事前の

研修を通して、また地元で理づくりをして本番に臨んでくれます。若い人たちにお道の素晴らしさを感じてもらえるよう、信仰の喜びを伝えさせていただけよう、そういう思いでつとめさせていただきますので、学生さんたちにその心が映っていくのだと思います。

●学生層育成の魅力(1)

そういうスタッフの真実に支えられて、学修を始めたとする様々な行事・活動を通して学生さんたちの心の生まれ変わり、そういう姿が実際にあるんです。私は学生層育成の魅力は、学生さんたちの心の生まれ変わり、そういう姿を見せていただけるおたすけの場であるということだと思います。

ひとつの信仰に触れる機会、ひとりの先輩の姿、ひとことの話、何とかと思ってかけさせていた言葉や声・思いというのは、学生さんたちにとって非常に大きな影響を与えるということを感じさせていただいております。学修はそういうおたすけの場であります。

学修は勿論、まなびば、その他の行事は「気づきの場」であります。私たちも人から教えていただいていることがたくさんあります。しかし自分の中で、「あー、そうか、なるほど、こういうことだったんだ」と改めて気づかせていただいで、

その一つのがより理解が深まるということが大いにあります。学生たちも自分で気づいてくれるということが、たくさんあります。親から言われて、会長さんから言われて、なかなか素直に聞けないようなことでも、学生同士のいろいろなやりとりの中で、グループワークの中で改めて気づける場が、自分たちで気づける場がたくさんあります。学修の感想文を見ると、改めてお道のすばらしさを感じた、神様のご守護を感じた、親神様への感謝の思い、親のおかげ、スタッフのおかげといった声が非常に多いんです。おかげがわかるということは、をやの之恩がわかるという非常に尊いことだと思います。

●学生層育成の魅力(2)

互い立て合いたすけあい現場であります。スタッフも成人させていただけ、育てていただけ現場であります。学生を通して互いに勉強させていただくことがたくさんあります。学生の姿を通して自分の今まで変えられなかったところを変えさせていただく、これはおたすけですよ。自分が如何に心をつくらせていただくか、心を入れ替えさせていただくか、互い立て合いたすけあい現場であるということも大いに感じさせていたいております。

●大事なこと

こういうことを通して如何に信仰を伝えていくか、映していくか、縦の伝道ということを通して何とかよふぼくとして育ててもらえるよう、一人前のよふぼく、立派なよふぼくに育ててもらえるよう丹精させていただくことが大事なのであります。どんなよふぼくか・・・「よふぼくは、みんなおつとめ奉仕ができるよふぼく。またよふぼくの子は必ずよふぼくに育てるといふ信念をもって、親から子へ、子から孫へ信仰を伝えていかなければなりません。それも代を重ねるにつれて、だんだんと理が深くなるようしっかりと伝えていきたいものであります」と真柱様はお聞かせくださいました。多くの教会長様方、先輩よふぼくの方々にこの点をご理解いただいて、大きく後ろから押していただかないことには、なかなか進んでいかないわけでありませう。そのために私たちができることは、先程も申しました、是非ともお道に触れる機会、信仰を育む場へ、声をかけて導き出してやっていただきたい。学修やまなびは、学生会行事、そういうところへ声をかけて引っ張り出してやっていただきたい。いやいやでも首に縄を付けてでも引っ張ってやっていただきたい。この点を切にお願いさせていただきますと思います。

●「学担発足30年記念担当者大会」での

真柱様のお言葉

「次代を担う若者へ私たちが伝えなければならぬことは、教祖の思召に則した信仰の喜びでありますから、まず自らが、日々陽気ぐらしを実践して、その姿を映して、をやの教えが届くように根気よく勤めていただきたいと思ひます。どうか教祖が教えられた誠の道を、確固たる信念をもって歩み抜いて、一人でも多くの立派なよふぼくを育ててくださるよう」と学生層の育成に携わる者の心構えについて改めてお仕込みくださいました。そういう上から「学生に信仰の喜びを伝え、立派なよふぼくに育つよう丹精しよう」というスローガンのもとつとめさせていただきますいております。

●お願い

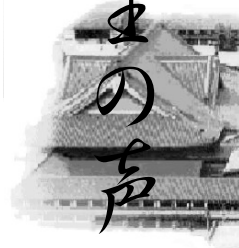
身近な学生の顔を思い浮かべてください。その年齢に応じた、学年に応じた声かけ、働きかけを常に意識しながらしていただきたい。こどもおぢばがえり、少年ひのきしん隊、春の学生おぢばがえり、学生生徒修養会というように、日頃から出来るだけダメモトでも声をかけていただいて、つないでやっていただきたいと思ひます。学生層の育成というのは、今言うて今すぐというわけにはまいりませぬ。10年先、20年先、30年先を見据え

ての御用でありますから、先を楽しみにどうぞ若い人たちの育成に互いに取り組ませていただきたいと思ひます。

笠岡の教会を通してつながる若い学生さんたちが、信仰をより深めていただいて、陽気ぐらしの世界をつくりあげていく、そういうよふぼくとして活躍をしていただけるように声かけ・丹精のほどを重ねてお願いさせていただきます、今日の学生層育成者講習会の話とさせていただきますと思ひます。

《以上要旨》

修養科生の声



修養科を終えて

新輝豊分教会 杉本 美由希

修養科を終えて頭に浮かんだ一言が、「あゝ、行って良かったなあ。」三ヶ月間を通った人だけに味わえるこの気持ちこそが、修養科で感じ取れるものなのだと思います。まさか、笠岡の修養科生が私一人だとは思ひもよらないこと…。三ヶ月間一人で通っていきけるのかどうか不安もありました。月次祭前後、私一人ということもあり人

不足でもあるので、詰所ひのきしんの方々には手
 伝って頂きました。ですから、私一人であっても、
 周りの方々が優しい気持ちで手助けしてくださっ
 たことで、不安に思うことなんて一つもないんだ
 なぁと思えることができました。そして、一人で
 の生活を送っていた私は、ゆっくりとした時間の
 中で自分自身を見つめなおすことができました。
 頭で考えて悩むよりも、一瞬一瞬で「なんとかな
 る!!」と落ち着いている方が、自分にとって気持
 ちが楽なんだと実感しました。そして修養科へ行
 けば同世代との交流もあり、私にとって毎日が楽
 しい時間でもありました。年末年始も含め日頃か
 らひのきしんで忙しいと思う反面、日曜日の休み
 にふと考えると、毎日会う仲間とのひのきしんは
 実は貴重な時間を過ごしているのだと初めて気づ
 かされました。私のような身上が
 ない人は、有り難いことに疲れき
 るまで勇み心と喜び心でひのきし
 んをさせて頂きました。ですが、
 足腰の痛みだけでなく身体の不自
 由をも感じ、皆と一緒に動きたく
 ても思うように動けない。ほんの
 些細なことでも不足に思ってしまう
 方もおられました。しかし、ここ
 からがおちばの良いところ。周り
 の方々は、どんな場所へ行っても



お互いをお互いに思いやり、助け合えば助け合
 だけ、そこから喜び心が溢れて出て皆の顔が明る
 くなっていくのです。一ヶ月目と三ヶ月目の皆の
 顔と心は、比べものにならないくらいとっても良
 い表情をしていました。車椅子に乗る方や杖をつ
 いて歩く方は、いつしか自力で歩けるようになり、
 驚く程の御守護を頂いて帰れるようになりまし
 た。ある修養科生のお婆さんが「杖はおちばへ奉
 納させて頂く」というのを
 言っておられ、この方は一
 生杖いらすの足を頂けたん
 だなぁと思わせて頂けまし
 た。このように、おちばへ
 行った人だけが味わえ
 る「御守護」があります。
 このおちばで
 の生活は、私
 自身も救われ
 たところはあ
 り、また、周
 りの先生方に
 も恵まれ、本
 当に有り難い思いでいっぱいです。
 優しく見守ってくださった先生方、
 三ヶ月間本当に有難うございま
 した。



練習の成果を全員で演奏

奉仕人育成目指して
 雅楽勉強会 開催

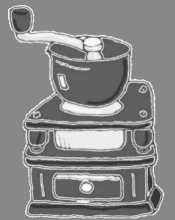
大教会雅鶯会(中島誠治楽長)は2月27日、大教
 会で第4回雅楽勉強会を開催、17人が参加した。
 教会の雅楽奉仕人の育成を目的に少年会員、一
 般初心者を対象に開かれた。

参加者は笙、箏、龍笛の管
 別に分かれ、8人の大教会雅楽
 奉仕者を講師に、管の持ち方、
 手の動き、唱歌など基本から学
 び、最後に練習の成果として会
 議室で平調・越天楽を全員で演
 奏した。

中島楽長は「今回初めての参
 加者もいたが、回を重ねること
 に雅楽に対する意識が変わってき
 ている。指導者も頑張らなけれ
 ば」と今後の抱負を話した。

参加者の1人、森本陽気君(小
 2・海松ヶ岡分)は「お兄ちゃん
 3人共、雅楽しとるのにどうして僕はさせてもら
 えんのん、とお父さんに頼んで連れて来てもらっ
 た。早くお兄ちゃん達と一緒に出来るようになり
 たい」と話していた。

談話室



子のつとめ

稲富士分教会 用木 須毛田 英尋
 明治7年のおふでさき第六号に次のような一句がある。

このはなしなんとをもふてきいている
 てんび火のあめうみわつなみや 六116

そして140年たってお言葉通り天から火の雨が降るが如く、津波は海ばかりか山から土砂流となつて押し寄せてくる有様である。その原因は人間が使用する膨大な生活エネルギーによるものである。人は文明によって豊かで幸せな生活を送れる筈が、それが高じ自由な市場経済原理の社会になつては、強くないと生き残れない考えが優先し、文明は資本家の戦いの道具化し、その結果膨大な消費エネルギーが地球温暖化を引き起こし甚大な自然災害に皆苦しむ様になった。はたらく事と仕事をすることはちがいがあると思わせる二句がある。

それしらずみな一れつハめへく
 わがみしやんでしことばかりを 十一 43

また

そばなるハしことばかりをふもている
 みへたるならばもんくかハるぞ 十二 38

仕事とは本来神様が思うはたらきの意味と違つた人間思案的労働で決して神様に受け取ってもらえない人間の強欲がからんだ行為と表わされているように思われる。仕事となるとどうしても人は自分や自分の会社を守るため、他人や他の会社に勝ちたい勝ち残りたい、他の負けが自分の幸福と思ふ様になり、自分たちばかりの成果、結果を欲しいと思ひ、それが叶わなければ負けをしみ、人の勝ちをにくいと思ふ様にもなる。をし、ほしい、にくいは火水風の一の神の心に背くほこりの心で、自由競争社会ではいくらでも膨張し、露骨化している。一方はたらくとは、神の思ひに叶つた労働の仕方、あくまで端々を喜ばす事で、自分が相手を喜ばすためには自分が損をすることもある損な道、陰の道を通る精神でそこには自ずとゆずり合ひの精神が生まれ、お互い生かされている、お互い働けるという感謝の念に包まれている。ダーウインは強い者が生き残るのではなく、環境に適した者が生き残る。という真理に到達した。環境に適するとは協調の精神が感じられ、持続性がある。であれば環境に適する所が、勝ち負けに固執し環境さえ悪化させる人類はいつまでも生存できるか否か。

なにもかもごふよくつくしそのゆへハ
 神のりいふくみへてくるぞや 二 43

強欲とは親の本当の苦勞を知らない子供が醜い財産争いをする様なもので、国や資源や市場の奪い合ひは親神様の真実のご苦勞を知らないからである。

せかいぢうこのしんぢつをしりたなら

ごふきごふよくだすものわない 六 121

親の言うに言えんご苦勞は子が喜ぶ事をひたすら見たいが故である。ならばその心をば押し、争う事なく互い立て合ひ助け合ふ事を肝に銘じて生きていく事こそ子としてのつとめであり報恩の道である。

成人式に思うこと

明石市分教会長 杉原博之

年明けて1月10日明石市の成人式「はたちのつどい2011」に補導委員として出席した。当市は今年新成人となるのが291名。男148名、女143名、何と不思議に同数に近いのは不思議だな。当日の出席は180名とのこと。その世話に明石市職員、また行事がスムーズに進むよう、トラブルの無いようにと明石の補導委員が100名以上参加、それに明石警察、兵庫県警、警備会社という大がかりなものだ。私は遊軍として市民会館(式次第会場)の外を歩き

回って警備、補導という担当になった。新成人に警備や補導等があつては困るので補導の制服を羽織っていても何にも無いことを願っている。10時の開始時間に近くなると、道路を封鎖して車の通行禁止にする。続々と若者が集まってくる。みんな笑顔だ。女性は殆ど着物だ。赤にピンクが多い。少し青、黒もある。振り袖に髪飾り、ファアを首に巻いている。実に晴れやかで美しい。男は黒の背広一色。地味だな。中にやはり羽織袴、草履履きがある。髪の毛を逆立てている若者もいる。いいちこ焼酎をらっぱ飲みしながら来るのもある。格好いいと思っっているんやろか？ 他のつっぱりグループに見せつけているのかもしれない。必ず群れている。まあ私は警官もいるし全く不安はない。だからツツパリも可愛いとも思える。会館では式次第が始まり、来賓挨拶や中学・高校時代の恩師のお祝いメッセージビデオや、明石出身の歌手の歌、明石の名産品が当たる抽選会が始まっている。会館での市長挨拶の後にお道の先生が新成人に「心」の成人を話してくれたらどんなにすばらしいだろうかなどと思ってみる。4時間の見回りなのではしゃいでいる新成人を見ていると色々な考えが浮かんでくる。年齢こそ成人を迎えたけど「心」の成人が伴わないと駄目なんだよと話しかけてみたい。「心」の成人を書いた冊子を配るのもいいかななどとも思う。営業に見え

て止められるかもしれない。会館に入らないで外で仲間と話している方が多い。皆、デジタルカメラで写し合っている。いいちこを飲んでフラフラしていた男性は会館内に入ってぐっすり寝入っている。外では要所要所に補導委員が立って見守っている。私の仕事の本番は実は式典が終わってから始まる。それは終わっても帰らないで会館前から動かない新成人を帰路につかすことだ。道路閉鎖を開放する時間が迫るのに会話に夢中で全く動かない。市役所本館からマイクで何度も呼びかけている。「新成人の皆さん、指示に従って立ち止まらないように進んで下さい」新成人が新生児に聞こえて来るぐらい言うことを聞かない。ここで実は必殺技がある。それは幅10センチ、長さ2メートルの帯状の丈夫な布に両端にリングが付いている。そのリングを握って補導委員が横一列に並んでゆっくり歩いて新成人達を押し出してゆくのです。帯の後ろからは何台ものハンドマイクを持った警備員が、「お進み下さい」と連呼している。嫌々ながら押し進められてゆく。こちらも少しずつしか進まないが辛抱の一字。押し出しは約3、40分掛かってようやく終了した。喧嘩も無く、壇上に上がるものもなく今年の成人式は終わった。成人式に年齢だけじゃなく、「心」の成人を目指そうという社会の風潮を寡聞にして聞かないのは残念だ。

こころの詩

▼咲かそう花を

2011.2.22

- 一、種を蒔こうよ 心の庭に
水をやりましょ うれしい水を
百二十周年の この句に
きれいな花が 見たいから
- 二、句がきたきた 句がきた
百二十周年の 句がきた
喜ろこびあふれる心の庭に
喜ろこびあふれた花が咲く
- 三、花を咲かそう 心の庭に
真実まいたこの物種が
百二十周年に芽を出した
つくし運びの花咲いた

鶴眞分教会長 寺下宏一さん

▼養徳社発行『陽気』誌三月号「道柳」より転載
▽今回の課題は「代」、笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されていましてので転載させて頂きます。おめでとうございませう。

準秀詠

東悠分教会前会長夫人 田林美智子さん
代々の守護命つなげて今の道

▼表紙の書

天場山分教会 役員 野津正樹さん

◆毎月ひのきしん

青年会

【と き】 3月20日(日)実施

※1月開催=23人、2月開催=23人

年齢に関係なくどなたでも参加お待ちしております。

◆おつとめまなび総会

少年会

【と き】 4月1日(金)

【内 容】 9:00 受付開始(模擬店チケット配布)

9:30 祭儀式・おつとめまなび開始

11:30 式典・わかぎ門出式・鼓笛演奏

12:30 昼食・模擬店、ゲーム

14:30 解 散

【模 擬 店】 東ブロック= ポップコーン 島 根 = ぜんざい

西ブロック= カレーライス 久 松 = スーパーボール

福 山 = 焼 そ ば 上 下 = フランクフルト

高 屋 = フライドポテト 府 中 市 = 射 的

※服 装 祭儀式:おつとめ衣

その他:ハッピー、学校の制服、白靴下

※3月31日午後7時より祭儀式・おつとめ・雅楽の練習

◆直属ひのきしん特別隊

布教部

【と き】 4月11日(月)~20日(水) 10日間

上・府ブロック

◆教祖誕生祭詰所受入れひのきしん

布教部

【と き】 4月17日(日)昼~20日(水)昼食まで

各ブロック1人、計6人

◆隊長変更について

少年会

3月で隊長の年齢制限が切れる隊は、新隊長に変更して下さい。

変更カード記入の上、4月20日に提出

◆全教一斉ひのきしんデー

布教部

【と き】 4月29日(祝・金)

◆別席ひのきしん団参

実行委員会

【と き】 6月25日(土)~26日(日)

【内 容】 25日 午後1時 東礼拝場にておつとめ、別席、ひのきしん

午後7時 記念講演(詰所)

講師・三川一郎先生(甲賀大・^{せいしん}勢津分教会長)

26日 本部月次祭参拝・別席

二月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます

親神天理王命の御前に 会長上原理一 慎んで申し上げます

親神様には子供かわいい一条の親心から 天然自然のお働きと身体のお働きと御守護下されると共に 陽気ぐらしと反する心得違いを正すべく 身上や事情を通してお知らせ下され陽気ぐらしへとお導き下さっております事は誠に有難く勿体ない極みでございます かしながら世の多くの人々はその理が分からず 只苦しみに喘いでいます事は誠に残念でなりません 私共は親心にお応えし御恩に報いるべく 旬の理を得て日々は喜び感謝の心のままに朝夕に御礼申し上げつつ 信仰の喜びを深め 伝え 広げようと 一言の声掛けを通して たすけ 一条の御用の上に 勤め励ませて頂いております

その中にも今日の吉日は 二月の月次祭を執り行う定めの日柄でございますので 只今からおつとめ奉仕人一同 今日の日を楽しみに寄り集いました部内教会長 よふぼく信者の真実をも心に湛えて 明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめさせて頂きます 皆のおつとめに寄せる真実心を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて 今今年度末に当たり 学生達は大きな転機を迎えています 進級・進学そして就職と期待に胸を膨らませている一方 不安も抱えています そしてそれを支える私達親兄弟も同じ心境でございます こんな時こそしっかりと信仰を伝えていかなければなりません 本日祭典に引き続き 学生層育成者講習会を開催させて頂き 改めてその重要さを学び思いを強くして より一層育ての上に尽力させて頂く所存でございます 又明日には教会長夫妻講習会をさせて頂きます 「ふうふそろうてひのきしん これがだい、ちものだねや」とお聞かせ頂きますように 創立百二十周年記念祭に向けての成人の歩みをより確かなものにすべく 夫婦の心を揃え 足並みを揃えて たすけ 一条の上に邁進させて頂く所存でございます

何卒親神様には 旬々にお聞かせ頂く親の声を頼りに成人の歩みを進める皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして 願う心の誠の理に自由の御守護をお現し下さり たすけ 一条の歩みがより勢いを増して お望み下さる陽気ぐらしの世の状が 一日も早く実現しますようお導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

大教会だより

◎第八三六期修養科

自 立教173年12月1日
至 立教174年2月27日

*教 養 掛

三ヶ月間 岡崎 和夫
(大教会役員・
弥高山分教会長)

一ヶ月目 枝 廣 隆 文
(東福山分教会長)

二ヶ月目 渡 邊 隆 夫
(神昭分教会長)

三ヶ月目 高 田 一 弘
(真府分教会長)

*修 了 者

新輝豊 杉 本 美由希

◎本部食堂ひのきしん

自 立教174年2月16日
至 立教174年2月28日

笠 岡 徳 山 毅

◎お知らせ

※本年の「大教会長杯親睦スポーツ大会」は中止になりました。

災害救援募金並びに救援物資の受け付けを開始

この度の「東北関東大震災」によって被害を受けられましたみなさまに心よりお見舞い申し上げます。周知の通り、教会本部では救援募金を開始しました(天理時報3月20日号参照)。笠岡大教会としても、災害救援募金並びに救援物資の受け付けを始めました。

募金は災害救援募金、または災救隊支援募金にさせていただきます。

救援物資は量によって、自治体に委託するか、他の運送機関に委託するか、また大教会自体として直接運搬するかを決断します。

笠岡のたすけ合いの心を被災地に届けたいと思いますので、皆様のご理解とご協力をお願い致します。

(救援物資に関しては、被災地復興の時期によって変わってきますので、大教会にお問い合わせ下さい)

現時点では、保存食(カップ麺、インスタント麺、乾パン)、お米、水、生理用品、粉ミルク、毛布、タオル、紙おむつ(幼児用、大人用)、ティッシュペーパー、トイレットペーパー等、いずれも新品の物に限ります。



十年以上前の話になるが、初めて参拝された方から祖父のことを聞かせてもらったことがある。「昔、貴方のお祖父さんが神様の話をしておられた。『神様は有難い 神様は結構な御守護を下さる』と言っておられた」と。この方は、今は隠居生活でF市に住んでおられるが、同郷の方で、若い頃はトラックを使って運送業をされていた。もう数十年も前の、車があまり走っていなかった時代のことである。祖父が出直した一ヶ月後に生まれた私は、信仰初代である祖父の姿を知らない。身上を御守護頂いて入信し、熱心に道を歩んだそうである。祖父は片道50キロの道を、自転車で上級へ運んだと聞くが、道中 その方のトラックに便乗させてもらったことがあるという。その時、車中で神様の話をしたということがあるが、数十年経ってもその時の祖父の姿、祖父の話を覚えていて下さったのである。祖父の心には、信仰の喜び、感謝の思いが溢れていたことであろう。私も祖父のような信仰がしたいと思った。

「一日一件にをいがけ」 改めて祖父の姿を心に置いて歩ませて頂きたい。

(は)

・原・稿・募・集・

内 容

①小随筆 ②教会・布教所の独自の活動の紹介 ③俳句・和歌・川柳 ④教会行事開催後の報告記事 等々

字 数

1000字前後(800字~1200字) 題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。俳句等は1句からでも結構です。

寄稿先

下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。

郵便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江377

FAX：0865-66-1314

メール：tenkasa@yahoo.co.jp

尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。

